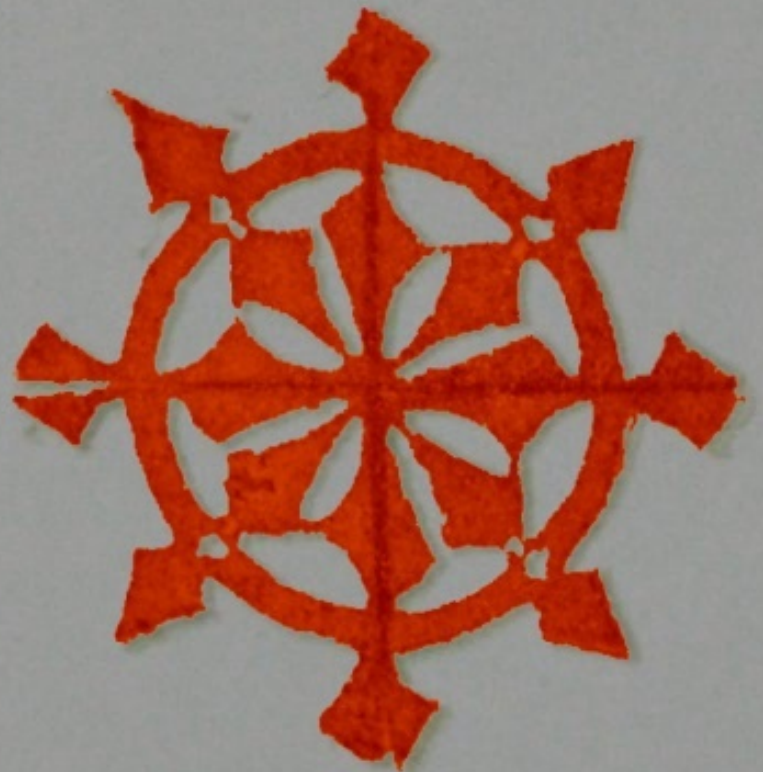


# 『仏道の心髄』

[第1版]

S R K W ブ ッ ダ



【2013. 12. 30版】

## 1章 覚りの真相

- 覚りとは何か 1936文字
- 覚りの解釈 1740文字
- 覚りの前後に起こること 2193文字
- 覚りの階梯 932文字
- 懺悔 850文字
- 帰依 985文字
- 覚りの機縁 663文字

## 2章 覚りの修行

- 修行とは何か 2, 173文字
- 修行に役立つもの 610文字
- 修行に役立たないもの 642文字
- 覚ったあとの修行など存在しない 748文字
- 誤った修行は地獄行きになるのか? 1, 124文字

## 3章 法

- 正法とはそもそも何か 966文字
- 正法の手引き 421文字

## 4章 四聖諦

- 四聖諦とは 490文字
- 苦諦 594文字
- 集諦 312文字
- 滅諦 315文字
- 道諦 460文字

## 5章 聖求

- 聖求とは 887文字
- 聖求なき者はどうなる 808文字
- 聖求は喚起できるか? 592文字

## 6章 戒律

- 具足戒 819文字
- 修行者が持つべき戒律 123文字

## 7章 観

観の実践 634文字

公案を援用した方法 374文字

観 (=止観) の完成 307文字

観とはならないもの 595文字

## 8章 遍歴

遍歴の実際 876文字

それは遍歴とは言わない 353文字

## 9章 法界

法界と諸仏 1, 523文字

諸天・諸神 772文字

悪魔とその軍勢 862文字

## 10章 魔境

魔境とは 795文字

チャクラおよびナーダ音 692文字

## 11章 地獄

地獄 1, 198文字

## 涼風通信のパスワード

---

ホームページ『覚りの境地』([http://www.geocities.jp/srkw\\_buddha](http://www.geocities.jp/srkw_buddha))

「涼風通信」の最新パスワードは下記の通りです。

→ 無料化にともない非掲載。

\*\*\*

## 【更新履歴】

---

- |             |                                |
|-------------|--------------------------------|
| 2011年12月18日 | 第一版完成。                         |
| 2011年12月19日 | 四聖諦について章を追加。 第一版として継続。         |
| 2011年12月22日 | 一部ルビに対応。                       |
| 2011年12月26日 | 遍歴について拡充した。                    |
| 2012年01月05日 | 集諦について拡充した。                    |
| 2012年01月07日 | 遍歴の実際および修行とは何かについて拡充した。        |
| 2012年02月01日 | 2章に一節を追加した。 「誤った修行は地獄行きになるのか？」 |
| 2012年02月10日 | 1章に一節を追加した。 「帰依」               |
| 2012年02月22日 | 全体的に、細かい点について拡充した。             |
| 2012年12月29日 | 11章を追加した。 「地獄」                 |
| 2013年01月23日 | 9章-1節「法界と諸仏」に引用を追加した。          |

一般に、仏教は難解であると見られているようである。しかしながら、仏教そのものは本来分かりやすい平易な教えである。実際に難しいのは仏道を歩むことである。釈尊以来およそ2500年が経過しているが、覚りの境地に至った人は極めて少ないという事実がそれを何よりも物語っている。これは仏道が険しい道であるということではなく、仏道を最後まで歩む人が少ないことを示している。ある者は途中で道を踏み外し、ある者は袋小路に迷い込み、ある者は落とし穴に落ち、ある者は道草を食って、ほとんどの修行者が生きている間に目的地まで到達しないのである。

本書は、この仏道を歩むことについて修行者が心得ておくべきことについてその心髓を記したものである。もちろん、すでに功德を積んだ育ちのよい人（＝生まれながらの菩薩）は本書を読まなくても周到に覚りに達するであろう。まっすぐに道を歩める人は、道の途中に道標などなくても目的地たるニルヴァーナに到着するからである。しかしながら、そうでない修行者もあるだろう。本書は、そのような修行者に向けて書いた。

本書は、仏道の心髓を簡潔に述べることを旨としており、敢えて平易な表現は採っていない。そのため、初学の修行者にとって内容は極めて難解なものとなっているかも知れない。また、仏道の心髓をずばり指し示すことを旨として書いており、敢えて冗長な表現は採っていない。本書を読み物として楽しんで読もうとする人にとっては物足りなく感じるかも知れないが、心髓のみを簡潔に書くことによってむしろそれぞれの真意が鮮明になると考えた。

静けさを目指し、究極の安らぎたるニルヴァーナに至り住することを願う人は、本書に挑戦して欲しい。浅学の者は読みこなすのに苦勞するであろうが、修行者にとってそれは必ずや空しからざる努力となるものと確信するからである。

ただし、邪な心で本書を読めばニルヴァーナに達するどころか地獄行きとなるであろう。正しい道の案内であっても、心得違いをする者にとっては役に立たないどころか身を滅ぼす悪魔の説と化してしまうからである。この点に留意してじっくりと読まれることを願う。

## 覚りとは何か

---

そもそも覚りとは何か？ それを説明したい。

覚りとは目覚めることである。何から目覚めるかと言うと、この世の虚妄から目覚めるのである。この世の真相は、世人が見ているようなものではない。覚るとその真相が見え、種々さまざまな虚妄が消滅する。

消滅するものの中でもっとも重要なものが「識別作用」である。と言うのは、人々（衆生）はこの識別作用があるために苦悩しているからである。

たとえば手でテーブルを強く叩くと音がする。人々にとってその音は不快なものとして感じられるであろう。しかし、よく考えてみるとその音自体には人を不快にするような特別な何かがあるわけではない。ただ机を叩いた音がしただけの筈である。実際、机を叩いた音は机を叩いただけの音に過ぎない。覚るとそれがまったくそのように聞こえ、不快感を生じたり、その音に驚いたりすることがなくなる。それで覚ったことによって識別作用が消滅したと分かるのである。

この識別作用は、いわゆる六識（眼耳鼻舌身意）それぞれに影響を与えている。覚るとそのすべてについて識別作用が消滅する。すなわち、外界との接触によって起こるそれぞれの識について人を不快にするような識別作用だけが消滅するのである。

ここで、「人を不快にするような識別作用だけが消滅する」という点が重要である。認識作用自体が消滅するのではなく、不快なものだけが消滅する。これは本当に不可思議なことであるが、覚ると実際にそうなるのである。ただし、同時に人に快を与えるような識別作用もほぼ終滅する。したがって、覚ると飛び上がって喜ぶような快を味わうことはできなくなる。それでも不快なものが一掃されるのは素晴らしいことである。それで覚りの境地を” 楽 ” と称するのである。

覚ると、この世は余計なものだらけであることが分かる。それどころか、この世のほとんどすべてが余計なものなのだと気づく。たとえば、子供が大人になったとき、子どもじみた玩具の数々がもうどうでもよいガラクタに映るようなものである。すでに覚った人にとって、衆生が喜ぶようなものは喜ぶに足りないものと映る。また、衆生がそれを無くしたと言って悲しんでいるようなものも、実は悲しむに値しない下らないものだと知るのである。

もちろん、この世のすべてが下らない、不要なものだと映るのではない。必要なものは必要なものだと分かる。ただし、そのようなものでもどうしてもそれがなければならぬかと言われれば別に無くてもよいもの、他のもので十分に代替できるものだと知っている。それゆえに、覚った人は特定の何かにこだわらない。たとえば釘を打つにはハ

ンマーが最適であることは当然のことであるが、ハンマーが無くても他のものを適切にその代わりにして釘を打つことができるようになるようなものである。

また、衆生は人間関係で多くの苦悩を受けている。しかしながら、覚った人は人間関係で苦悩することがない。全人類がいわば我が子が家族になったような対応ができるようになる。心の中に巣くっていた悪を完全にとどめているので、何かと敵対することがない。敵対することがないので無敵（敵がない）である。それで未来を危ぶむような不吉なことがない。不吉なことは多く人間関係から現れるものだからである。

覚った人は、憂いがなく、過去のことを思い出して悲しんだり、未来のことがらについてあくせくすることがない。ただ現在のことがらについてだけで生きている。なぜそうなるのかと言え、過去はすでに過ぎ去ったものであり、未来はまだ到来していないと如実に知るからである。現在の安らぎは過去のことがらすべての結果であり、過去を変える必要がない。未来のことは今現在何をどのように計らおうともそれに従ったものとはならないことを知っている。すべては結果オーライとなり、思惑など抱かなくても最善・最良・最高の結果となることを知っている。なぜそうなるのかは説明できないが、覚った人の行為は必ずそのようになるのである。これは本当に不可思議なことであるが、それがそうなる境地が覚りの境地であることは確かである。

覚った人は、死を超克している。死の恐怖はなくなり、来世を願うこともない。この世においても、すでに為すべきことを為し終えていることを知っている。衆生世間に楽しみがあることは知っているが、その楽しみはすでに自分を心から楽しませるものとはならないことを知っている。けだし、真の楽しみは安らぎ（＝ニルヴァーナ）であることを如実に知っているからである。これは痩せ我慢ではない。余計なものがない楽しみを知り、世間の人々が余計なものを抱え込んでいるゆえにかえって苦悩に喘いでいることを見るからである。



覚りとは何であろうかと覚ったあとで考える。それが覚りの解釈である。覚りの境地は、覚る以前にはまったく知らなかった境地である。本来、世俗の何かに似ているとか似ていないとは言ふこと自体ができないものである。それでも敢えて覚りを解釈するとすれば以下のようなになるだろう。

もちろん、覚りの解釈など本来は不要である。そんなものを知らなくても覚る人は覚るだろうし、それを予め知っていても覚らない者は覚らないだろう。それでもここに覚りの解釈を述べる気になったのは、これを知ることによって少しでも覚りに近づく人もあるかも知れないと思ったからである。

さて、衆生にとって覚りとはどのようなものだと考えられているのだろう。一般によく見受けるものの一つは「覚りとは何か重大なものを身につけることである」という見方である。しかし、覚りの実際はこれとは正反対である。覚りとは「余計なものが無くなって、すべてが明らかとなるもの」だからである。

端的に言えば識別作用の滅がそれである。識別作用の滅を見たからには、心を含め、身体の中にある何かが無くなったと考えるのが通常理解だろう。仏教では、その無くなったものを名称と形態（*n a m a - r u p a*）と呼ぶ。なお、これらが同時に消滅するのが本当の覚り（慧解脱）であるが、形態（*r u p a*）だけが消滅する場合がありますそれを形態（*r u p a*）の解脱、あるいは身解脱と呼ぶ。また識別作用の滅には至らないが言葉によって起こる苦悩の消滅を見る場合がありますそれを名称（*n a m a*）の解脱、あるいは心解脱と呼んでいる。

これらをたとえて言えば、壊れた弦楽器があり聞くに堪えない音を出していたとしよう。楽器そのものを完全に粉碎消滅してしまうのが慧解脱である。楽器の本体と言うべき重要な部分を破壊してしまうのが形態（*r u p a*）の解脱である。弦をうまく張って綺麗な音ができるように調弦したのが名称（*n a m a*）の解脱である。もちろん、完全なのは慧解脱である。形態（*r u p a*）の解脱は、もうそれが音を出すことはないの慧解脱と近いが、そこにまだ楽器の残骸が残っているという点で違いが認められる。名称（*n a m a*）の解脱は楽器を本来の姿で用いることであるが、調弦されているとは言えうっかり不快な音を出す恐れが残るという点では不完全な解脱である。

ところで、覚りによって無くなる二つのもの、すなわち名称と形態（*n a m a - r u p a*）とはそもそも何なのであろう。構成概念として考えたとき、名称（*n a m a*）は言語や文化の基底を為すものと考えられ、形態（*r u p a*）は人間としての魂（元型：アーキタイプ）や情念、本能などを司る諸機能の土台とでも言えそうである。つまりこれらこそ人を人として見せているものの本体なのであろう。覚るとそれらが適宜に消滅するわけであるから、覚った人は根本的に人としては数えられない存在となる。

人々（衆生）は、名称と形態（n a m a - r u p a）ゆえに人として生活している。しかし、この二つのものがあるゆえにありとあらゆる苦悩が襲いかかるのであることを知らない。ただ、これら二つのものを滅した覚者だけがこれらこそ苦悩の本体となるものであると知っている。そしてこれら二つのものがなくても何ら困ることはなく、むしろそれによって人格の完成を見るのだと知るのである。そして、それゆえにもろもろの如来は覚りを勧め、苦悩からの解脱を説く。名称と形態（n a m a - r u p a）とを残りなく滅ぼすことを目指して修行せよと説くのである。

子供達にとって子どもじみた玩具が宝物であり、他愛のない遊びに興じることが人生のすべてに見える。しかしながら、その子供達も大人になったならば、他愛のない遊びに興じることには楽しみを見い出せなくなり、子どもじみた玩具も捨て去ってしまう。大人には大人らしい本当の趣味の世界が広がっており、仕事に精を出すことに喜びと楽しみとを見い出すようになるからである。それと同じく、覚った人はニルヴァーナという大いなる楽しみがあり、信仰と功德という宝がもたらされ、智慧によって生きる最高の生活を送る。そうして世俗の楽しみをすべて捨て去ってしまう。それと同時に、一切の苦悩と憂いをも捨て去るのである。

## 覚りの前後に起こること

---

修行者にとって、覚りはまるで突然に訪れる。しかしながら、実際にはある種の予兆が確かに存在している。

修行者において、覚りは一瞬に完成する。しかしながら、実際には覚った後でしばらくの間は覚りの余波とも言うべき一風変わった現象が現れることがある。

まず覚りの前、期間にして2～3日前からもうすぐ覚りが訪れるような妙な気分になる。実際には、それは覚りということとは無関係なことなのであるが、こころの奥ではそれが覚りに関連したものだともまるで分かっているかのような感じである。こんな言い方しか出来ないのは、その予兆が覚りの予兆であったと分かるのが覚った後のことであるからである。つまり、覚りの予兆は覚りが完全に為し遂げられた後にあれがそうだったと確定する性質のものなのである。たとえば、重い風邪などにかかっている人がいわゆる病状の峠を越えたとき、もうすぐよくなりそうな気がふとするのであろう。峠を越えた確証はないが身体全体の感覚からそう思うのである。そしてそれがまさしくそうだったことは病気が完全に治ってから分かることである。それと同じく、覚りの前にもうすぐ覚りが訪れるに違いないという独特の感覚が起こる。私(=SRKWブツダ)の場合、覚る3日ほど前の朝に『何か分からないけれどももうすぐ覚れる気がする』と家族に口に出して言ったほどである。

細君(涼風尊者)の場合には、ちょっと劇的だった。その日は車で二人で買い物に行った。帰って来て駐車場に車を止めてふと車の後を見ると500円玉が落ちていた。そこは駐車場の端っこであり人が滅多に通る場所ではない。しかも直ぐ見れば分かるように落ちていた。もしもその場で落とすのであれば、落とし主が直ぐに見つけるに違いない場所だ。それでこう思った。これは諸天の計らいなのだろう。丁度細君になけなしの500円を借りていたところだったので、返金するつもりで細君に差し上げた。実は、私にとって500という数字は特別な因縁があるようだ。と言うのは、覚る直前に見た夢の中に500円という値段が出てきていたからだ。割愛するがそれ以外にも500という数字にまつわることが私にはある。つまり、縁起がいいので細君にあげたというのが本当のところだった。そして、それは実際に縁起のよいものとなった。その500円玉を拾った日に、それを細君に差し上げた2～3時間後に細君が形態(rupa)の解脱を果たしたからだ。この場合の予兆は本当にはっきりとした不思議なものであった。単なる感覚ではなく物理的な現象として現れているからである。

さて、次に覚った後に起こることを述べよう。覚るとすぐに識別作用の滅が実感される。これはすでに述べた。それ以外に、覚った後しばらくの間いろいろと面白いことが起こる。それが面白いと感じるのは、覚り以前に抱いていたいくつかの誤った覚りの概念が、滅びる時に最後の光を放つかのように現実的な感覚として現出するからだ。

具体的に言おう。たとえば覚ると他心通を生じるということを、私は覚り以前において仏教的な知識として知っていた。しかし、私が抱いていた概念はまるで超能力的なもので、遠くの人々が考えていることがその人のことを念じれば分かるというようなものだった。すると覚った後しばらくしてそれが実際にあるかのような気がした。会社の同僚が今何を考えているのかを読みとり、向こうが私に電話をかけたいと考えているというような気がした。そこでこちらから電話をかけてみると、相手は別に私に電話をかけようとしているわけではなかった。「何か急用ですか？」相手はそう応えた。それで、この感覚は自分の妄想に過ぎないと分かったのである。なお、本当の他心通とは「目の前にいる人も、遠くにいる人も、その人の心が完全に分かる」ということである。具体的には、目の前にいる人の心は天眼通によって、遠くにいる人の心はひろがりの意識を通じて知ることになる。

また、自動書記という現象が取りざたされることがある。自分の意志とは無関係にまるで自動的に霊からの通信を書き殴るというものである。これも覚った後で起きた。ただし、私の場合には霊からの通信という形ではなく、ある文字を紙に書こうとするとその文字の形に机の面が凹んでいて、その凹み通りにボールペンが字をなぞっていくという感覚だった。つまり、自分の個性的な字を書くのではなくその凹みが示す予め指定された形の字しか書けなくなるのである。しかしもちろん、机に文字の形の凹みなどは存在していない。が、本当に机の面が文字の形に凹んでいるように実感されたのである。

さらに、人々の前世の名前が分かるような気がしたり、ある歌の歌詞を全世界の国の言葉に翻訳する能力が身に付いたような気がしたりした。もちろん、それらは皆デタラメなのだが、その時には本当にそれが出来る気がしたものである。

これらの面白い、一種笑うべき現象は、自分の心の中に残っていた濁りのようなものなのだろう。それらが沈殿する前に最後のあがきを示した。たとえばそのように考えると何となくつじつまが合う。ただし、これらの現象は数日間で消え去ってしまうので心配はいらない。敢えて注意するならば、覚った直後は余り公的には行動しない方が賢明だということである。しばらくは自分だけで覚りの余韻を噛みしめるくらいで丁度よい。

## 覚りの階梯

---

覚りはいかなる段階の説にも従わない。これは真実であるが、覚りには階梯があると言う。すなわち、預流・一來・不還・阿羅漢（仏）である。また、心解脱と慧解脱を区別する。これはどういうわけであろうか？ それについて述べたい。

そもそも覚りの階梯があると言うのは、実際に覚った人に違いが見られるからであろう。正法にしたがい、智慧によって解脱した完全な解脱と、どうやら完全ではない解脱があるのを見て、階梯というものを立てるに至ったと考えてよいだろう。

さて、現代・現在・現時点における解脱者は私を含めて3人しか知らない。すなわち、カッシー長老と涼風尊者とSRKWブツダである。また、現代・現在・現時点において仏弟子だと認められる人々が数人いるだけである。それぞれの人を階梯と言う観点から見れば次のようになると考えられる。（2011年12月現在）

預流向... 数人... 初歩的な公案の通過

預流果... 3人... 基礎的な公案の通過

不還向... 1人（カッシー長老）... 名称（nama）の解脱（初期の心解脱）

阿羅漢果.. 1人（涼風尊者）... 形態（rupa）の解脱

ブツダ... 1人（SRKWブツダ）.. 名称と形態（nama-rupa）の解脱（慧解脱）

これらの階梯は、ブツダを除いて固定化されたものではないと思われる。つまり、どの階梯にいる人も最終的にはブツダ（慧解脱）に達し得ると考えてよいだろう。と言うのは、私自身最初に心解脱を生じ、次いで観の完成を見て、さらに慧解脱したからである。もちろん、これは誰もがそうなることを保証するものではない。不還果や阿羅漢果の場合には死んだのちもうこの世には戻ってこないからである。

なぜ覚りの階梯を生じるのかについてはその理由は分からない。それぞれの修行者の気根の違いとしか言えないだろう。男で生まれる人もあれば、女で生まれる人もある。それと大して違わないことだと思える。もちろん、前世の徳行の多寡などを持ち出す必要もない。それがどうであろうと、現世で達した階梯が自分の功德の実質なのだと認めるしかないからである。

もちろん、修行者はブツダ（慧解脱）の階梯を求めるべきである。慧解脱こそが完全な解脱であることは疑いがないからである。

『懺悔（さんげ）とは、懺とは死ぬまで犯さぬこと、悔とはこれまでの過ちを知ることである。』（六祖壇教）

まさしくこの通りなのであるが、その具体的なこと、それがどのように修行者に起こるかは分かり難いであろう。

懺悔は、修行の途中で起こることではなく覚りの刹那に起こることである。修行者は懺悔するゆえに解脱すると言っても過言ではない。修行者は解脱したゆえにその懺悔が懺悔として完成する。これが実際に起こることである。したがって、それ以前において修行者が懺悔と称するものはすべて懺悔の範疇には入らない。

たとえば子供が大人になったとき、自分が大人になったと知り、子供に逆戻りすることはあり得ないと覚知するだろう。それがいわば懺にあたる。また、自分が大人になったと知ったとき、ついこの間まで自分が子供だったと知るだろう。それがいわば悔にあたる。これが懺悔の一つの有り様である。これはいわば客観的な観点による懺悔の理解である。

そして、実は懺悔にはもう一つの有り様がある。それはいわば主観的な観点による懺悔の理解である。そしてそれこそが修行者が実感する懺悔に他ならない。解脱の瞬間、修行者にはある思いがよぎる。その思いはまるでふと思いついたものであるが、自分にとってあり得べき究極の思いであると実感されるものである。その思いの質や賢愚は問わない。まるで馬鹿げた思いに思えても、それが智慧にもとづく真実の想起であるならば、それこそが懺悔を為し遂げる原動力となる。すなわち、修行者はその思いにまつわって懺悔し、そのまるで懺悔だとは意識しない懺悔が悪を完全にとどめることになるのである。次いで解脱が起こる。

このように、懺悔は覚りの道において重要な、決定的な行為を担っている。しかも修行者は、懺悔しようとして懺悔してはならない。結果的に真の懺悔を為し遂げたとき、その時に限り解脱は起こるのである。

また、懺悔は信と結びついている。自分を信じ、さらに相手を信じるゆえに、懺悔は為し遂げられるからである。

前節では、懺悔について述べた。そして、懺悔によって解脱が起こると書いた。

ただし、実際には懺悔と同時に帰依を生じる。実のところ、懺悔によって解脱が起こるのか、帰依によって解脱を生じるのかは判然としない。ただ、覚りの刹那、これら二つがあることは事実であり、これら二つがあることによって解脱が起こると見てよいだろう。

本節では、帰依について述べる。

さて、懺悔は、功德と関係があるものである。一方、帰依は信仰と密接である。すなわち、信仰の究極が、帰依であるからである。

帰依とは、それ以降の人生をすべて仏道修行に充てるという決心である。

したがって、覚り以前において帰依することはできない。帰依は、頭の中で行なうものではないからである。口で『帰依します』と言ったところで、帰依したことにはならない。帰依は、覚りを生じるまさにその直前に、その刹那の一瞬に為される、仏法への真の傾倒・没入を指す言葉である。

人は、ことに臨んだそのときに「法の句」を見出す。その一瞬に、善知識を見い出せば慧解脱が起こり仏となる。また、その一瞬に、三宝に帰依すれば身解脱が起こり阿羅漢となる。

ことに臨んだそのときは、因縁によって出現する。それで、これを一大事因縁と呼ぶ。すなわち、一大事因縁によって智慧を見れば仏となり、三宝に帰依すれば阿羅漢果を得るということである。

誰であろうとも、容易に帰依することはできない。仏教を篤く信仰していて、旦那(ダーナ)である人、さらにはすでに修行を積んだ立派な修行者であったとしても、それだけで帰依を生じることはできないからである。

全財産を三宝に布施・供養したところで、帰依とはならない。たとえ三宝に命を捧げても、それは帰依とは言わないのである。

帰依は、自分を活かし、自分も三宝も輝かせるものである。この輝きによって帰依者には解脱が起こり、三宝は光を増す。帰依し終わった人は、出家者であり、〈道の人〉とも呼ばれる。帰依し終わった人は、ふたたび世俗に戻ることはできない。帰依し終わった人は、諸仏の誓願に生きる人、あるいは諸仏の誓願にしたがって生きる人となっているからである。

くり返しになるが、帰依は信仰の究極の相である。正しい信仰を持ち、保ち、励む人

は、必ず仏法に帰依することができるであろう。その時、その瞬間が到来するまで、修行者はゆっくりと邁進せよ。



覚りの機縁を得て、それをものにした人は発心する。発心すれば一気に覚りへと近づく。覚りは、遠からず起こるであろう。発心した人にとって、今世での覚りは、ほとんど約束されたようなものである。

通常、覚りの機縁は予想もしない思いがけないところから現れる。そもそも、覚りの機縁となる人が見知った人であるとは限らない。その時だけ出会い、その時点ではそうとは知らずに別れて行くことも当たり前のように起こる。事実、私(=SRKWブツダ)自身、覚りの機縁はまさしくそのようであった。今となっては、その人の顔も名前も覚えていない。初対面であったし、二度と会うことはないであろう人だからである。探そうにも、探しようもない。

その一方で、すでに見知った人が覚りの機縁となる場合、好悪の感情を超えてそれは起こる。別に何とも思っていない人が覚りの機縁となることは普通のことであり、敵さえも機縁となることがあるだろう。もちろん、ごく親しい人が機縁となることも少なくないだろうが、そのような時でもそれは思いがけなく起こるだろう。実際、釈尊時代のテーラーガーターやテーラーガーターには、そのような例が散見される。

今世で覚りを達成するには、この覚りの機縁を生じて発心しなければならない。しかしながら、血眼になってその人を探しても見つかる筈もない。覚りの機縁を恣意的に喚起することは、決してできないからである。ただ、仏道に勤しむところある人は、きっとこの機縁を生じて発心するであろう。信仰篤き人は、必ず覚りの機縁を生じる。これは、おそらく間違いないことである。

覚るには修行が必要である。しかしながら、修行とは言ってもそれは何か固定的なものではない。人は次第次第に覚りに近づき、ついに解脱するのであるからである。それを為し遂げたとき、後づけで分かるのが修行である。あれこそが自分にとっての修行だったのだと覚った後で知るのである。

修行は、功德と密接に関係している。人は功德を積んでついに覚る。そして、修行をすべて積んだ人が仏となるのである。

修行を十分に積んでいないと仏になることは出来ず、阿羅漢となる。修行を僅かしか積んでいないと、不還や一來にとどまる。それはそれで素晴らしい境地であるが、仏でなければ知り得ないこともある。一切知見を得ようと思うならば仏にならなければならない。修行者は、本来仏を目指すべきである。仏こそが人としての真の完成だからである。

修行を十分に積むためにはそれなりの時間がかかる。それで拙速なことは勧められない。修行はじっくりと行なうべきである。もちろん、今世で覚るに越したことはない。が、今世の覚りをあきらめて敢えて来世に功德を廻向してでも仏を目指すという考えはあながち非難されるものではない。一來果の因縁はこのような考えがあって生じるものであろう。

例によって知恵の輪の話で説明したい。時間をかけてじっくりと取り組み、見事知恵の輪を解いて、その全貌を完全に理解した人。つまり、外すことも元に戻すこともできて、知恵の輪の成り立ちをすっかりと知った人。彼が仏にあたる。つぎに、それなりの時間をかけて知恵の輪を正しく解いた人。彼が阿羅漢果である。彼は解くことは出来ても元に戻すことができない。解けはしたがじっくりと時間をかけて解けなかったので、知恵の輪の成り立ちを完全には理解し尽くすには至らなかったのである。それでも同じ知恵の輪を見たならばすべて解くことができる。それで解くという点では仏の境涯と何ら変わらないと言える。この世を正しく生きていくということについてはそれで充分である。さて、知恵の輪を拙速に解こうとして知恵の輪の正しくない別解を見つけてしまった人が一來である。ただ、彼はこの知恵の輪が解けるということは知った。確かにピースは分離されたからである。しかし、彼は真の解を知らない。したがって、すでに分離してしまった知恵の輪を元に戻すこともできない。それで同じ知恵の輪を別に探してきてもう一度挑戦するしかない。それで一來となる。ここで、覚りの場合にはもう一度挑戦することは来世に望みを繋ぐしかないからである。そして、他の人が知恵の輪を解いたことを聞き知って、この知恵の輪は確かに解くことができるのであると正しく信じてきた人が預流果である。最後に、かれ自身はその知恵の輪を解くことが出来なかったが、やや低レベルの別の知恵の輪を見事に解いてその低レベルの知恵の輪の全貌を理解した人が不還である。彼は少なくとも知恵の輪がなぜ知恵の輪と呼ばれるのかについては完全に理解した。それで当該知恵の輪も知恵の輪であると知ることがで

きた。当該知恵の輪を解くことはできなかったが基本的な目的は果たしている。それで、覚りの道の場合この世に戻ってくる必要性をすでに感じていないことになり、死してのちもうこの世には戻ってこない。

知恵の輪はじっくりと取り組むべきもので、次第次第に解けるものであり、そうでなければ解いたときの感動を味わうことはできない。修行はじっくりと取り組むべきもので、次第次第に覚りに近づくものであり、そうでなければ解脱したときに〈特殊な感動〉を生じない。修行は、このように行なうべきものである。

じっくりと... ゆっくりと... このとてもヒントには思えないことがらが大きなヒントである。と言うのは、最後の最後を決定づけるのはこれらのことがらに他ならないからである。具体的に何をしたかという内容ではなく過程そのものが修行の本体である。心構え正しく、功德を積んだ人だけが覚るからである。

極端に言えば一々の修行の内容などどうでもよい。過程が修行の本体である。それで、もろもろの如来は「正しい遍歴をせよ」と説く。知恵の輪に取り組んでいるときでも一々の操作を憶えたりしないであろう。そんなことをしなくても解けるときには完全に解けるからである。

一々の操作を憶えていなくても、解けたときにはその全貌が明らかになる。赤色を知ろうとして見た一々の赤色を憶えていなくても、たった一つの赤色によって赤色全体を認知したときにはすべての赤色が分かるようになる。これが実際に起こることである。覚りも同様である。たった一つの智慧を知ることですべてが明らかとなるのである。

人を覚りに導き至らしめる善知識も、言葉そのものは平易な言葉である。知恵の輪を解く一つ一つの操作が簡単なものであるように、赤色が無数にありながらそのどれによっても赤色の認知が起こり得るように、子供でも知っているような平易な言葉が時として偉大な法の句となる。それが善知識に他ならない。それはいわゆる起承転結に従わず、その他のいかなる人為の感動のプロセスに準じない。それは咄嗟のことであり、一瞬のことであり、身近に出現する世にも不可思議なる言葉である。それを知って真実を明らめ、解脱する過程が修行に他ならない。

## 修行に役立つもの

---

心構え正しき立派な修行者は、あらゆるものを修行に役立て、修行の役に立たないものには決して近づかない。しかし、そう言われても、普通の修行者は何をどうしてよいか分からず、身も蓋もないであろう。そこで、以下に修行に役立つものを挙げる。この通り修行に勤しむならば、その修行者こそが心構え正しき立派な修行者であると認められる。では、列挙しよう。

身近かな人々と仲良くして、しかも安易に迎合しないことは修行に役立つ。人々（衆生）は距離的にも心理的にも年齢的にも遠くの人とは争わないが、身近かな人々とは争いがちだからである。

生活が簡素で、ゆっくりとした時間を多くつくることは修行に役立つ。とくに夜は重要である。夜の三つの区分の一つだけでも目覚めているべきである。

仏や菩薩に親近することは修行に役立つ。もちろん、誰もができる環境にあるとは言わないが。

自分がどうなりたいのかを考えること（想起すること）は修行に役立つ。

決して独りよがりにならず、身近かな人々との関係をよいものにしようと思うことは修行に役立つ。

嫌なことをするのではなく、むしろ好きなことに取り組み、しかもそれによって覚ろうとしないことは修行に役立つ。

嫌なことを嫌だと公言することは、修行を阻害しない。

心の仕組みについて探究することは、修行に役立つ。

人間の尊厳について考究することは、修行に役立つ。

人と世の真実を見極めようとするのが、修行そのものである。

## 修行に役立たないもの

---

「これは修行を阻害するものとなる」などと言う不埒なものは存在しない。しかしながら、世間において「これは修行に役立つものである」と少なからず信じられているにも関わらず実は修行には役立たないものがある。それを以下に挙げる。

瞑想（メディテーション）やいわゆる坐禅（真の坐禅ではないパフォーマンス）は、修行には役立たない。魔境を生むだけである。

力んで修行することは、修行には役立たない。それでは善知識も近づいてはくれないだろう。

怠惰であることは修行を破綻させる。最後の最後でしくじることになるだろう。

いかなる苦行も、覚りには役立たない。修行は楽しみとともに為されるべきものである。

いかなる儀式も、修行とはならない。修行は、新鮮な気持ちで対峙して為されるべきである。

仏にすがっても絶対に修行は完成しない。

他の人々を論破することは何の役にも立たない。紛糾を生むだけである。

いわゆるボランティア精神は、修行とは無関係である。

いかなる経験も修行には役立たない。解脱は咄嗟に起こるからである。

知識の多寡は修行の可否とは関係がない。

見識の有無によって修行の速さに違いは見られない。

成人していない者の修行は修行とはならない。

すでに老齢にある者の修行が完成することは容易ではない。

自分だけで覚れると考えている者はすでに道を踏み外している。

真理ならざるものを真理であると見なすならば、修行の完成は遠い。

真理を真理ならざるものであると誤って断定し、誹謗するならば、地獄へと赴く。

## 覚ったあとの修行など存在しない

---

いわゆる「悟後の修行」など存在しない。なんとなれば、解脱して識別作用の滅を見たならば他に別の解脱など存在しないからである。そして、この解脱は逆戻りすることがない。形態（*r u p a*）が解脱するときには、苦悩のよすががすべて残りなく終滅する。0（ゼロ）は0であって、0以外の何ものでもないように、本当に解脱したときにはすっかり解脱し終えるのである。それゆえに、そのような人にとって悟後の修行など何ら存在しないのは当然のことである。つまり、修行は果てのあるもの、終わりがあるものであると知っている。それで覚った人のことを”修行完成者”と呼ぶ。

ではなぜ、「悟後の修行」などという言葉を目にするのであろうか。それは、覚っていないのに覚ったと勘違いしている者があるからである。

何某かの境涯に達し、自分では覚ったと思っけていても、もしも煩悩の火が残っていて心の動揺が静まっていないならば、それは覚りでも何でもないものであると知らなければならぬ。そのような者は、残った煩悩——実はわずかさえも煩悩を滅してはいないのであるが——を滅するための果てしない修行が仏道であるなどと言うだろう。彼は、自分では覚ったつもりでいても、すぐに元の木阿弥になることを知っているからである。その現実を見て、「悟後の修行」などという誤った考えを起こすのである。しかし、これはまったく愚かしいことである。いかなる仏も、覚った後に修行が必要だなどとは決して言わないからである。

欲にしたがい、物を欲しがるように覚りを求める者が、魔境に陥って愚かな考えを起こす。安らぎを求める修行者は、決してこのような事態に陥ってはならない。聖求によって解脱し、この聖求によってその解脱が真の解脱であると覚知せよ。真の解脱知見は、虚妄ならざるものだからである。

## 誤った修行は地獄行きになるのか？

---

正しい修行も、誤って行くと地獄に落ちることがある。これは本当のことである。それゆえに、修行者は心して修行しなければならない。

しかし、だからと言って修行者が修行に取り組むことを恐れていては話にならない。心構え正しき修行者は、そんなことを危惧しなくてもまっすぐにこの円かなやすらぎ（＝ニルヴァーナ）へと到達するからである

それでも、もしかしたら？ と修行に恐怖を感じる人もあるだろう。そこで、絶対に地獄行きにならない修行の心得について以下に記す。

先ず、何よりも大事なことは正法を誹謗してはならないということである。これさえしなければ、どんな修行をしても地獄に落ちることは決してない。なお、表現はさまざまだが、ここで正法とは次のことを指す。

正法： 人は真実のやさしさを知ることによって仏となるという事実。

すなわち、やさしさの追求が仏になる道であるということを誹謗しない限り、何をどのように考えていても地獄に落ちることはないということである。

次に注意すべきことは、自分の浅はかな修行の正当性を信じる余り、たとえうっかりでも仏、阿羅漢、〈道の人〉を傷つけてはならないということである。これさえしなければ、どんな行為をしても地獄に落ちることは決してない。

最後に注意すべきことは、法（ダルマ）が正しく語られるのを遮ってはならないということである。これさえしなければ、どんなことを論じても地獄に落ちることは決してない。

修行者は、たったこれだけのことを注意しておくだけで、地獄に落ちる怖れは無くなる。

三つのことをしないように注意さえすれば、地獄に墮ちる心配はいらない。この損なってはならない三つとはいわゆる三宝（仏法僧）のことである。逆に、三宝を敬う人は天界に生まれる。天界とは、三宝が満ちている国のことだからである。

地獄に墮ちた者は気が遠くなるような長い時間おそろしい苦悩に喘ぐ。そして、容易にはこの世には戻って来られない。決して為してはならないことを為した報いであるが、それがなぜ分かるかと言うと、生まれながらに三宝を損なうような邪悪な者がこの世に生を受けるのを見ないからである。



人々には見えないから、地獄が実在しないのではない。地獄からこの世に帰還することが極めて難しいので、地獄の実在が人々には見えにくいに過ぎない。聡明な人は、地獄の実在を覚知する。試したことはなくても、麻薬や覚醒剤の恐ろしさを知っているようなものである。心構え正しき修行者は、地獄など何の縁もないが、ある者どもにとっては地獄は決して遠いところにあるのではない。自分がどちらか分からない人は、三つの悪しきことがらをうっかりでも為さないように気をつけるべきではある。

## 正法とはそもそも何であるか

---

正法とは人を覚りに至らしめる偉大な力を持った文章のことである。人は、この正法によって仏となる。

正法は、意味の通じる文章であって呪文ではない。しかしながら、人は正法の意味を理解することによって覚るのではない。人は正法を縁として覚るが、正法を理解したゆえに覚ったのではないと知るからである。つまり、正法は理解できなくても覚ることができる。覚り以前においては、ただ正法を知っていれば充分である。覚った後で、正法の意義を知ることになるからである。

修行者が正法を知らなくても阿羅漢果を達成することはできる。しかし、正法を知らない者が仏になることはあり得ない。正法にしたがい、正法により、正法の真の理解を生じつつあるとき、まさしく正法を理解する機縁を生じ、因縁があって、正法の記述が真実であると知った人が、この正法によって仏となる。

正法は、修行者が真実を知ろうとすることと密接に関係している。修行者が真実を知ろうとするゆえに正法の理解を生じる。正法を書いた仏たちも修行者が真実を知ろうとすることを前提としてこの正法を書き記している。もし経典に正法の記述がなければ、仏教が仏教として伝わることはなかったかも知れない。

正法は（法身の）諸仏たちが書かせたものではない。正法は、この世に出現した仏たち（如来）が書き記したものである。仏たちは、苦悩する人々が覚り、自分と等しく異なるところがないようになって欲しいと願ってこの正法を書き記した。この正法を完全に理解した仏が後の世に出現したときに、まさしく仏になったのだと知らしめるためにも仏たちはこの正法を書き記したのである。

正法は修行者を仏にならしめる威力がある。その反面、正法によって地獄に墮ちる者も現れる。心が邪であるならば、正法はその者をすみやかに、まっすぐに地獄へと突き落とすからである。それゆえに、仏たちは注意深く正法を経典の中に書き留めている。心構え正しき修行者だけがこの正法によって仏になることを知っていたからである。

正法は、法（ダルマ）の本質をずばり明らかにしている。余りにもはっきりと書き下されているので、心が邪な者には恐ろしい副作用が現れる。それゆえに、みだりに正法を開示してはならない。開示すべき人に、開示すべき時に、開示するに相応しいやり方で開示しなければならない。

正法は、完結した文章である。したがって、正法を解説することには特別な意味はない。笑い話を解説するようなものである。それでも、正法の意味が分からないという修行者のために敢えてその手引きを記したいと思う。

すべての正法は、ただ一つのことを主張している。それは、

『真実にやさしい人は必ずあなたの身近に現れる それを自ら発見せよ』

とすることである。具体的には、

『諸仏世尊はただ一大事因縁のみによって世に出現したまう（法華経）』

である。あるいは、このことを一種逆説的に説くものもある。

『衆生を完成するのに随って、その仏国土が浄らかになる（維摩経）』

また、釈尊のように覚りの過程をそのまま表現したものもある。

『諸々の尊敬さるべき人が、安らぎを得る理法を信じ、精励し、聡明であって、" 教え" を聞こうと熱望するならば、ついに智慧を得る。（スッタニパータ）』

いずれにせよ、真実のやさしさとは何かを知ることでは覚ると言っているのである。

## 四聖諦とは

---

四聖諦とは、四つの聖なる真理という意味である。通常、苦・集・滅・道の四つを挙げる。それぞれ、次のように要約される。

苦諦：苦があるという真理

集諦：苦には原因があるという真理

滅諦：苦は滅することができるという真理

道諦：苦を滅する道が存在するという真理

仏たちがこれらを説くのは、人々（衆生）が苦に安住していながら、そのことについての自覚がないことを憂えてのことである。仏たちには苦は存在しない。そして、人々（衆生）もまた覚れば苦を抜くことができ、そのことそれ自体は保証されている。四聖諦は、それが誰にとってもそうであることを説くのである。

素質豊かな人は、これだけ聞いただけで覚りを求める心を起こすだろう。そのような人は四聖諦についてこれ以上追求する必要はない。四聖諦は、人々（衆生）に覚りを求める心を起こさせることを目的として説かれたものだからである。それで原始仏典では四聖諦そのものはあまり登場しない。すなわち、原始仏典の舞台はサンガ（僧伽）が中心であり、サンガ（僧伽）に集う人々はすでに覚りを求める心を起こした人々であるので敢えて四聖諦を説く必要がなかったのである。

錯覚に陥っていてそのことを知らないならば、錯覚から抜け出すことはとてもできないであろう。それと同じく、人々（衆生）は苦に安住しているが、苦の本質を知らなければ苦から脱れようとは思わないだろう。

錯覚は、それが錯覚だと分かっても錯覚としての感覚的認知は相変わらずである。つまり、それが錯覚だと知っただけではその錯覚そのものから脱れることはできない。その一方で、苦はそれが苦であると覚知したならば最終的には抜け出すことができる。苦を脱したときには苦を脱したとはっきりと覚知することができる。これを解脱知見と呼ぶ。

さて、四聖諦では苦・集・滅・道の四つを説くが、実は苦を知った時点でそれを滅する道をすでに歩んでいるのである。もちろん、苦を知っただけですぐに覚りが訪れるわけではない。しかしながら、苦を知った人が正しい遍歴を為すならば覚りは遠からず訪れることになるであろう。それが道に他ならない。聖求ある人は、自ら機縁を生じ、不可思議なる因縁によって覚ることになる。解脱を達成するまでの時間には修行者によって早い遅いの差はあるが、苦を知った人の覚りはその時点ですでに約束されていると云ってよいのである。

ところで、本書では苦の説明そのものは割愛する。苦の本質は、修行者が自分自身で見極めなければならないものだからである。ここでは苦諦の心髄だけを書いておく。

苦諦： 衆生はすべて苦に安住している。

苦の原因にはたくさんのものである。しかしながら、それらはすべて群を為しており各個撃破ではなく一掃することができる。これが集諦である。

すべての苦は縁起であり、原因と結果とが互いに相依関係にある。すなわち、

”これ”があるゆえに、”かれ”がある —— 1 順観

”これ”がないゆえに、”かれ”がない —— 2 逆観

であると知られる。また、

”これ”が生じるゆえに、”かれ”が生じる —— 1 ´ 順観

”これ”が減するゆえに、”かれ”が減する —— 2 ´ 逆観

そして、これらのことが苦の原因を一掃できることの根拠となる。

集諦の心髄： どれでもよい 一つの苦の原因を滅したならばすべての苦の原因が同時に滅する。

いくら苦の原因を一つでも滅しさえすればすべての苦の原因が同時に滅するとは言え、どの苦の原因も滅することができないものならば集諦を説く意味はない。しかしながら、苦の原因は滅することができる。それが滅諦である。

滅諦の根底には無常観がある。無常観と言うのは、この世のことがらはすべて移ろうという真理である。この世には何一つとして、極わずかでさえも移ろわないものなど存在していない。それゆえに、苦もまた無常であると知られる。苦が無常であるゆえに、苦は滅することができるものであると分かるのである。そして、実際に仏たちは一切の苦の滅を見た。その事実を以て滅諦を説くのである。

滅諦の心髄： 苦の原因はどれもが滅することができるものである。

苦の原因を滅する道がある。それによって苦の全体が滅することになる。それ説くのが道諦である。

ところで、修行者にとって重要なことは道はあっても自分を含めてすべての人々（衆生）がその道を歩めるのかということであろう。また、先だって解決すべきことはその道を歩むためには何か特定の条件が必要にならないかという疑問であろう。道諦は、まさにそれらの疑問に答えるものである。

道諦の心髄： それぞれの人にはそれぞれに苦の原因を滅する道が確かに存在している。

その根拠を問う人もあるだろう。それには次のように答えなければならない。

『この世に仏が出現するということが道諦の存在を確からしめているものである』

すなわち、もしもこの道諦が法（ダルマ）として普遍に成立していなければ、この世に生き身の仏が出現して広く理法を説くということ自体があり得ないこととなるであろう。しかしながら、実際にはこの世に出現した仏たちは皆、この道諦が真実であるという揺るぎなき確信をもって人々（衆生）に広く理法を説く。ゆえにこの道諦は正しいと言えるのである。



求めるから得ることができる。覚りもまたそのようである。しかしながら、覚りはただ求めるだけでは得ることができない。覚りは、聖求（しょうぐ）によってのみ得ることができる」と説かれる。

修行者の中には、覚りを求めてはいるが聖求なき者がある。それでは彼は修行者とは呼べない。その一方で、人々の中には覚りを明確に求めてはいないが聖求ある人がある。そのような人はすでに修行者の部類に入る。

もし覚りに素質というものがあり取えてその有無を論じるならば、それはこの聖求の有無に帰せられるだろう。

聖求ある人の聖求を損ない挫くことは誰にもできない。聖求なき人に聖求を与えたり喚起することも誰にもできない。聖求とは求めでありながらその本質は心底においてすでに知っている「それ」のことだからである。この心底の「それ」を表面的なことで云々することはできないからである。つまり、聖求は外的なことにも内的なことにも影響を受けず、他の人が影響を与えることもできない。

聖求ある人は修行の成否を心配するに及ばない。遠からず覚るだろうからである。問題は聖求なき者である。聖求なき者は覚ることができないのであろうか？ 結論を先に言えば、聖求なき者はおそらく今世で覚ることはないであろう。今世の功德を来世に廻向するしか方法はあるまい。そのような者はSRKWブツダという仏との縁によって覚ることはないが、功德を積んで聖求を廻向するならば他の仏との縁によって覚ることができるだろう。

ところで、ここで言うておきたいことがある。聖求の有無はどうあれ、今現在の修行は決して無駄にはならないということである。その果報が今世で現れるか、来世で現れるかの違いがあるだけである。その意味では、修行に勤しむ人は何ら心配することはない。

あるものを無いことにすることはできない。無いものをあることにすることもできない。それが聖求の真実である。また、自分に聖求があるかどうか気になる者もあるかも知れないが、聖求とはそのような範疇のものではない。ではなぜ仏たちは聖求について語るのかと言え、聖求があつてこそ覚ることができるからである。

## 聖求なき者はどうなる

---

聖求なき者はおそらく今世で覚ることはないと書いた。聖求がなくても今現在の修行そのものは無駄にはならないとも書いた。それでも、聖求なき者が今世で覚る道はないのであろうか？ 聖求なき者にとって、そもそも修行は成立しないのであろうか？

結論を言わねばなるまい。聖求なき者はどうあっても今世で覚ることはないだろう。聖求はそれほど決定的な覚りの要因なのである。聖求なき者にとって、あらゆる道は閉ざされていて覚り（ニルヴァーナ）に通じていない。生まれつき全盲の人に景色を見よと言うようなものである。

次に修行のことである。結論を言えば、聖求なき者にとって修行そのものが成立しないと考えるべきであろう。生まれつき全盲の人に絵を描かせて、それによって素晴らしい絵が完成するだろうなどは決して言えないようなものである。無理なものは無理だと言わねばなるまい。

聖求なき者の修行は成立しない。ならば聖求なき者はどうすればよいのか？ 何ができ得るのか？ その問いに答えなければなるまい。その答えは次のようなものになるであろう。

『聖求なき者は布施・供養して旦那（ディヤーナ）となり、功德を来世に廻向するしか覚る方法がない。』

すなわち、聖求なき者は覚りの気根そのものを欠いていると言わざるを得ない。前世で功德を積まなかったのだらうとその理由を言えなくもないが、それをどのように言ったところで詮なきことである。

ただし、ここで留意すべきことは、たとえ覚りの気根を欠いていようとも修行者としての資質が疑われるものではないという点である。たとえば生まれながらに全盲で生まれたからと言って、その人を「人ではない存在」などと名指しして尊厳を損なうことは決してできないであろう。それと同様である。

たとえ聖求があっても預流にしか達しない人もある。現世・現時点の聖求の有無によって覚り（＝安らぎ）を願う人々を区別することなど本来できないことである。

## 聖求は喚起できるか？

---

最初の節で「聖求なき者に聖求を与えたり喚起することは誰にもできない」と書いた。本当にそうなのであろうか？ 結論を言えば、これはこの通りであるとしか言いようがない。

では、「聖求なき者が自分自身で自分の聖求を喚起できるか？」という問いならばどうだろう。

これについては別の答えになるだろう。

『聖求なき者が、仏道には聖求というものがあることを聞き知って、自分もその聖求を持つと思ったならば、それが聖求を持つことの始まりとなり得る。』

これは、いわゆるその気になるということである。そして現在聖求を持っている修行者といえども、生まれながらに聖求を持っていたというよりも、むしろ仏教のことを聞き知ってその気になり、今世において聖求を持つに至ったというのが的を射た言い方かも知れない。

また、ある人の場合、他の人が仏教の進んだ境地に至ったことを知って発心し、その発心と同時に聖求を持つに至ったという事実も認められる。(涼風尊者の例) 彼女は、明らかに最初は聖求がなかった。

これはたとえば独身貴族を楽しんでいて結婚する気などさらさら無かった人が、乗り気でないお見合いに無理矢理出席させられたところ相手の人に一目惚れしてしまい、同時に結婚したいという気持ちをも生じたなどと言う場合に似ている。

すなわち、自分自身によって自分自身の聖求を喚起することは充分にあり得ることであると言えよう。

仏弟子たる修行者には、戒律が授けられる。戒律を授かったとき、その修行者は出家者として認められるのである。そして、戒律を破れば破戒僧となりサンガ（僧伽）を破門される。

サンガ（僧伽）においては、より多くの、完全な戒律を授けられて修行する方が、不完全な戒律を授けられて修行するよりもすぐれていると周知されている。そのため、破戒して破門される恐れが増すにも関わらず、釈尊の時代にも多くの修行僧が完全な戒律を授けられることを望んだと言う。

ところで、仏や阿羅漢は破戒の恐れがない。彼らは完全な具足戒があるので、破戒することがないのである。具足戒とは、授けられた戒律ではなく自ら備わっている完全な戒律である。

たとえば、大人は子どもじみた行為をすることができない。遊びとは言え、今更かくれんぼや鬼ごっこをすることはできない。身体機能に障害があるのではない。健康体であるが、かくれんぼや鬼ごっこはできないのである。形式的にさえもできなくなる。それが大人になるということである。具足戒も同様である。すでに完全な解脱を果たした仏や阿羅漢は、戒律を破ろうとしても破ることができない。完全に身につけていてつねにその戒は体現されている。それで”具足戒”と名づけるのである。

修行者がたもつべき戒律としての具足戒を授けられそれを守ったならば、基本的には仏や阿羅漢と何ら変わらない行為を為すことになる。一般の人々（衆生）から見たとき、具足戒を授けられた修行者と、具足戒がある仏や阿羅漢との違いを見いだすことはできないだろう。それでそのような修行者は仏や阿羅漢に対して行なわれる布施・供養と同じものを人々（衆生）から受けることになる。結果、その修行者は仏や阿羅漢と同じ功德を得ることができるのである。このことが、多くの修行者が完全な戒律を授けられることを望んだ大きな理由である。

『人は行為によってバラモンともなる。』 釈尊のこの言葉は、それを完全に裏付けている。

## 修行者が持つべき戒律

---

最低限度、修行者が持つべき戒律は次のものである。  
邪なことをしない。

自らの悪を放置しない。

自ら得たもの・与えられたもので暮らし、盗まない。

自ら為すべきことを見失わない。

とくに身近かな人を、悲しませない。

言葉によって他の人を迷わせない。

観こそが、覚りの修行の王道である。観（＝止観）を完成させてこそ、慧解脱は起きるからである。観の要諦について、以下に述べよう。

観を行なうにあたって最も大事なことは、観の対象である。「衆生」を観の対象としなければならない。そうして、観においてこの衆生を完成させたとき、修行者は仏に出会うことになる。

観は、観るということである。どこを観るかではなく、どう観るかでもなく、相手を観るのでもなく、自分を観るのでもない。正しく観るということであるが、それはありのままに観ることでもない。

正しく観たならば、咄嗟のことが想起され、同時に仏を見ることになる。それを為し遂げたとき、観は正しく為されたのであり完成したのである。

不味いものをいくら食べても、美味しいということは絶対に分からない。美味しいということを知るためには美味しいものを食べなければならない。美味しいものを食べて、美味しいということの意味が分かった人だけが美味しいということを知る。それと同じく、観でないものをいくら為しても、観でないものの情報をいくら集めても、それによって観が分かることはない。まして観を為し遂げることには絶対に結びつかない。魔境に陥る危険が高まるだけである。観は、正しい観を為してこそその本質が分かり、観を完成させる可能性が生まれる。

観を為すことができるかどうかは、その人の功德次第である。すでに観を為すだけの功德を積んだ人だけが観を為し、ついに完成させる。そうして、仏と出会うのである。

## 公案を援用した方法

---

公案は、ある程度まで観の代用品となるものであるが、代用品はどこまで行っても代用品に過ぎない。まして公案で覺りに近づくことができるなどと考えるはならない。精神統一をしたいのに、精神集中で代用するようなものである。円を描きたいのに、多角形で代用するようなものである。まるで本質を欠いた行為なのである。

ただし、公案を解く過程においてそれが観になる場合がある。公案が観に化けたのではない。公案を解いているつもりで、実は観を実践してしまったのである。この場合に限り、公案は観を援用するものとして働いたと認められる。

このようなことが起こるのは、取り組んだ公案がまるで曖昧な表現を持ち、しかもより本質的なものだったからである。そのような公案として（久松真一氏の）基本的公案が挙げられる。すなわち、

「どうしてもいけなければどうするか」

を公案とするのである。

## 観（＝止観）の完成

---

観は、止観の両方が同時に完成したときに完成する。止によって観が現れ、かつ観によって止を生じる。

また、止観は定慧とそれぞれ対を為している。止によって定を生じ、かつ観によって智慧が現れ得るからである。したがって、観の完成とは智慧を導き出す起爆剤となるものであると考えて大過ない。

ここで注意しなければならないのは、観の完成がすなわち覚りではないということである。観の完成によってさらに覚りを生じるには、それらをつなぐ因縁が必要である。それを一大事因縁と呼ぶ。

それでも観の完成を見れば心解脱の完成は認められる。観の完成に伴って名称（n a m a）の解脱が達成されるからである。これにより修行者は少なくとも不還果となる。



## 観とはならないもの

---

世間では、観ならざるものを観、あるいは観の補助となるものと見なして努力している者がある。しかし、観ならざるものにいくら熱心に取り組んでも、それによって解脱することはできない。

論理的考究は観ならざるものであり、観とはならない。

哲学的探究は観ならざるものであり、観とはならない。

法学的研究は観ならざるものであり、観とはならない。

神学的追求は観ならざるものであり、観とはならない。

瞑想（メディテーション）は観ならざるものであり、観とはならない。

肉体的静止は観ならざるものであり、観とはならない。

音楽活動は観ならざるものであり、観とはならない。

”ハイ”は観ならざるものであり、観とはならない。

薬物作用は観ならざるものであり、観とはならない。

知識の結集は観ならざるものであり、観とはならない。

経験の集約は観ならざるものであり、観とはならない。

見識の転用は観ならざるものであり、観とはならない。

ひらめきは観ならざるものであり、観とはならない。

啓示は観ならざるものであり、観とはならない。

言葉で伝え得るものは観ならざるものであり、観とはならない。

表情で表し得るものは観ならざるものであり、観とはならない。

表象は観ならざるものであり、観とはならない。

情念の結びは濁りであって観ならざるものであり、観とはならない。

煩悩そのものは観を生じる基底ではなく、観とはならない。

修行者は正しい遍歴をせよ。それによって覚りの機縁を生じ、因縁によって覚ると期待され得るからである。ところで、正しい遍歴とは実際のところどのようなものなのだろうか？ それを述べよう。

ここに答えがあるであろうなどと決め打ちするのではなく、縁によって見聞きしたものをさらに吟味して、疑義を正し、疑問を解決しようとする。それが正しい遍歴である。

これ見よがしな境地に満足することなく、真の崇高なる境地を目指して真実を追究すること。

自分ならざる何のものにも依拠することなく、目の前のことがらについて恥じることのない行為を適宜に為し、為し遂げること。

目の前の人を軽んじることなく、もしその人がいなければ自分がやりたいことが出来なくなってしまうのだと考え、知って、誠実にことを処すこと。

せき立てられることなく、自分をけしかけることなく、静けさを目指してゆっくりと邁進すること。

怪しげなことを語る者は、都合が悪いことは隠してしまうだろう。しかしながら、この一なる道にはなにも隠すところがない。知りたい人は知ればよい。誰が何を隠そうとも、すでに聖求を起こした人は、自分自身で知るべきことをすべて知ることになるだろう。それが修行であり正しい遍歴に他ならない。

ここで言っておきたいことがある。人は遍歴の結果として覚りに至るのではないという点である。つまり、遍歴の中身そのものは修行とはならない。遍歴とは、覚った後に遍歴で知った下らないことがらにはもう二度と戻らないという知識（=戒）を与えるものである。もちろん、遍歴の結果として自分の為すべきことが思い当たり、それが覚りの機縁になるという場合はある。しかし、それはむしろ例外的なことであると考えて差し支えない。聖求ある人は、まっすぐに覚りに到達するからである。それは遍歴の結果ではなく、多かろうが少なかろうが自分の遍歴そのものをまっすぐな道としたのである。このとき修行者は知る。紆余曲折な遍歴の結果として覚りに至ったのではなく、過不足のない正しい遍歴によってまっすぐに覚りに至ったのであるとすることをである。

## それは遍歴とは言わない

---

世の中をうろつき、さすらいと遍歴とは違う。以下のことがらは遍歴とは言わない。

手に取ったものを吟味することなく、次から次へとあさること。

今まで触れたことのないところにこそ真実があると手前勝手に断じて、触れてはならぬものに不用意に触れること。

世界の果てにこそ善知識がいると考え、その出会いを求めて流浪してしまうこと。

快楽を求め、美に酔いしれて、あるいは圧倒されて、異教に馴染んでしまうこと。

美辞麗句に惹かれ、あるいは脅されて、誤った教えに心酔してしまうこと。

聞く耳を持たず、耳聡くなく、誤った見解を世間に吹聴して回ること。

手段を選ばず、目的を遂げようと奔走すること。

徒党を組み、独り居の時間を持つことなく、無為に過ごしてしまうこと。

世間の利欲に幻惑されて、自分自身を見失ってしまうこと。

法界の諸仏が現世に智慧を出現せしめて法の句として発する。それが善知識である。修行者はその善知識を耳にして正法の真実を知り、因縁によって解脱を果たす。これが覚りという現象の全貌である。

ところで、そもそも法界とは何なのであろうか？ 諸仏はなぜ現世に智慧を出現せしめようとするのであろうか？

さて、そもそも法界を見たことがあるか？ と問われれば

『見たことはない』

と答えるしかない。では、なぜ法界があるなどと言えるのであるか？ と問われれば

『この世にはないものが時として出現するので、その出所が法界であると考えられない』

と答えなければならないであろう。この世にはないものとは何か？ と問われれば

『智慧』

と答えることができる。智慧をこの世に出現せしめているのは誰か？ と問われれば

『諸仏がそうしているのであろう』

と答えるべきだと言えよう。と言うのは、この世の誰も智慧を知らず、それを知るのはただ諸仏だけだからである。

ただ、未だ分からないことがある。なぜ諸仏は智慧をこの世に出現せしめるのか？ という点である。そのいわゆる動機については、次のように推定することができる。

『この世の衆生が解脱して仏（如来）になると、衆生を自分と等しく異なることがないようにしたいという誓願を持つに至る。その誓願は法界の諸仏も同じなのであろう。そして、それゆえに諸仏は時としてこの世に智慧を出現させて、本質的に自分と等しく異なることのない生き身の仏（うつせみの仏）をつくり出そうとしているのであろう。』

すなわち、そのような動機を持つ存在が諸仏に他ならず、それゆえに諸仏は諸仏と呼ばれるべき何かであると言うべきことである。

なお、釈尊が法界について語っている経典は少ないが、少なくとも次の箇所は法界に

ついて詳細に述べている部分である。

【 第二六章 安らぎ（ニルヴァーナ） 】 注記1)

{中略}

21 不生なるものが有るからこそ、生じたものからの出離をつねに語るべきであろう。作られざるもの（＝無為）を観じるならば、作られたもの（＝有為）から解脱する。

22 生じたもの、有ったもの、起こったもの、作られたもの、形成されたもの、常住ならざるもの、老いと死との集積、虚妄なるもので壊れるもの、食物の原因から生じたもの、——それは喜ぶに足りない。

23 その出離であって、思考の及ばない境地は、苦しみのことがらの止滅であり、つくるはたらきの静まった安楽である。

24 そこには、すでに有ったものが存在せず、虚空も無く、識別作用も無く、太陽も存在せず、月も存在しないところのその境地を、わたくしはよく知っている。

25 来ることも無く、行くことも無く、生ずることも無く、没することも無い。住してとどまることも無く、依拠することも無い。——それが苦しみの終滅であると説かれる。

26 水も無く、地も無く、火も風も侵入しないところ——、そこには白い光も輝かず、闇黒も存在しない。

27 そこでは月も照らさず、太陽も輝かない。聖者はその境地について自らあるがままに知り、自己の沈黙をまもって、かたちからも、かたち無きものからも、一切の苦しみから全く解脱する。

28 さとりの究極に達し、恐れること無く、疑いが無く、後悔のわずらいの無い人は生存の矢を断ち切った人である。これがかれの最後の身体である。

29 これは究極たる最上の境地であり、無上の静けさの境地である。そこは、一切の相が滅びて無くなり、{世間に} 没することのない解脱の境地である。

---

注記1) 引用： ブッタの 真理のことば 感興のことば 中村元訳 岩波文庫 青  
302-1 ISBN4-00-333021-8

ここでは諸天・諸神と表現するが、一般には護法善神と呼ばれている。その名の通り、法（ダルマ）を守る神々であり、ひいては仏道を歩む修行者を守護すると言われている。実際、修行者にはまるで何か危険を回避してくれているような不可思議なことが起こるし、それは解脱しても変わらない。法（ダルマ）を求め、実践する人は何かに護られているという実感が確かにある。

さて、諸天・諸神の出自であるが、それは法界ではなく天界であると考えられる。と言うのは、諸天・諸神が修行者を守護するやり方がとても人間的なものだからである。それらはまるで偶然を装ってはいるが、どこか人が差し向けたような匂いを感じるのである。この点は、法界の智慧とはまったく違っている。

修行者を守護するためには、その他の人間を動員しなければならない。それでその手法は人間くさいものとなるのだろう。智慧は人間とは余りにかけ離れていて、相手が菩薩ならいざ知らず、それを用いてはいわゆる低俗な人々（衆生）を動かすことはできないからである。たとえば町中で妙なる調べを流しても足をとめる人は少ないであろう。が、どこかの一角で大きな爆発音を立てれば多くの人々が何事かと急ぎ集まってくるだろう。一種野蛮なものほど人々を動員する変な力を持っているからである。

それでも一部場合によっては高尚な手段が用いられる。その一つが陀羅尼（ダーラニー：総持）である。これは智慧に似たものであり、極わずかな言葉によってあらゆる人々を御することができる特別な言葉（呪文）である。これはとくに善男善女を守護するために用いられる。この陀羅尼を耳にした人は、彼らに危害を加えることは決してあり得ない。この陀羅尼の出自も天界だと考えられるが、これは諸天・諸神が未来において自分たちが仏になるための功德を積んでいるのだと考えてよいであろう。

その本当の正体は不明であるが、人々（衆生）が解脱して覚ることを好まず、人々をこの世にそのまま留めようとする存在が知られる。それが悪魔とその軍勢である。

悪魔とその軍勢は人々にいろいろな影響を与えようとするが、その手段は一般に低俗で野卑である。それゆえに、彼らの出自は人間界よりもいわば低い界であると考えて差し支えないであろう。仏教用語にはそれらを表すいくつかの名称があるが、ここでは敢えて特定しない。

悪魔とその軍勢の特徴は、言葉を使わずに身振り手振りや表情、音声などで人々を惹きつけ、あるいは脅し、すくませ、また意味もなく安心させて、結果的にこの世に留めようとすることである。しかし、その活動は単発的であり、連動して畳みかけたようなものは少ない。それぞれの手口もバラバラで、統一性に欠けている。指揮系統がはっきりとは見えない。どこか投げやりで、起伏が激しい割には散漫であり、集中的でない。その場限りで、永続性が認められない。知的でなく、動物的な臭いがする。それでも人々（衆生）をこの世に留め置くには充分過ぎる力を持っているのは確かである。釈尊という偉大な仏の出現以降にも多く存在する享樂的で俗悪な歴史の事実群がそれを物語っている。

さて、具体的には 1) 欲望 2) 嫌悪 3) 飢渴 4) 妄執 5) 惰眠 6) 恐怖 7) 疑惑 8) 傲慢 が悪魔とその軍勢の仕業によるものであると考えられる。

人々（衆生）がこれらに馴染むと、無上の楽しみたるニルヴァーナに向かうことを止め、劣悪なこの世にこそ留まりたいという気持ちにさせられる。また、本来、人にはこれらの8つの悪癖は無いのであるが、まるでそれが人の本来的な性質であるかのように見せかけられ、思い込まされてしまう。その結果、人々（衆生）はこれらを容易に捨て去ることができなくなってしまう。自分自身で自分をこの世に縛りつけてしまうのである。

しかしながら、解脱した人はこれらの悪癖をすでに離れている。元々存在しないものなのであるから、解脱と共にこれらが一掃されるのは当然のことである。



## 魔境とは

---

修行者に隙があると、魔境に陥ることがある。一度魔境に落ち込むと、人によっては容易に抜け出すことが出来なくなる。しかし、魔境がどんなものかを知っていれば恐れるに足りない。

魔境とは、一言で言えば「仏国土の下手な複製」である。まともな人であれば、本物よりも複製（おもちゃ）の方が好ましいとは思わないだろう。しかし、悪魔とその軍勢は人々（衆生）の隙につけ込んで、複製が本物よりも魅力的なものであるかのように見せかけ、愚かな人々を惹きつけてしまうのである。

さて、悪魔とその軍勢はいわば勝手に人々（衆生）を幻惑しようとするのであるから、それを横から止めさせることはできない。できることは、人々が幻惑されないように魔境の真実を知らしめることであろう。

先ず大事な結論を言おう。それは、聖求ある人は決して魔境には陥らないということである。と言うのは、聖求ある人は、自分が到達すべき境地について微かであるが確かな覚知を持っているので、魔境はそれにはあたらないことをすぐに見破ってしまうからである。たとえば、葉っぱでできたままごと遊びのお札を、本物のお金ではないと簡単に見破るようなものである。

聖求なき者は、魔境に陥ることがあり得る。そのような人でも、魔境に陥らないための方法や抜け出す方法を知っていることは役立つに違いない。その具体的な方法は、悪魔とその軍勢の手口を知ることである。すなわち、1) 欲望 2) 嫌悪 3) 飢渴 4) 妄執 5) 惰眠 6) 恐怖 7) 疑惑 8) 傲慢 がそれである。日々の修行によってこれらの悪癖を御すならば、魔境に陥ることは決してないであろう。うっかり魔境に陥ってしまった人でも、これらの悪癖を御することで魔境から抜け出すことができる筈である。

子供達がつまらない遊びを卒業して大人になるように、修行者は世俗のつまらない享楽や騒動から離れ抜け出して、仏の世界に親近すべきである。

魔境ではないが、瞑想（メディテーション）を行なうとチャクラが見えたり、ナーダ音が聞こえたりするようになる。これらは覚りとは本質的には関係がないものであるが、一定の関係が認められるものでもある。と言うのは、解脱するとチャクラが見え始める人があるからである。

チャクラは、釈尊の仏伝では覚りを開いた朝に見た「明けの明星」として知られているものである。しかしながら、スッタニパータやダンマパダなどの主要な原始経典においてはその明確な記述は認められない。つまり、釈尊もこれは覚りとは無関係であると考えていたのであろう。

私（＝SRKWブッダ）のことで言えば、覚る20年前からチャクラは見えていた。さらに覚る15年前には目を開けた状態でもつねにチャクラが見えるようになった。現在もそうである。チャクラはつねに見えている状態である。しかしここで考えてみて欲しい。もしもチャクラが覚りに関係があると言うのなら覚る20年も前から見えていたのはいかなる理由であろうか。チャクラがつねに見えるようになった時から15年も経ってやっと覚ったのであると考えたとき、チャクラは覚りとは無関係であろうと言うべきことが分かる。このことはナーダ音についても同様である。いわゆるナーダ音が聞こえるようになったのも、覚る20年前であるからである。

それでも早とちりする修行者は、瞑想（メディテーション）によってチャクラが見えたりナーダ音が聞こえるようになると何かの境地に達したような気がして有頂天になるかも知れない。それこそが魔境に陥る隙となる。神秘的なものに憧れる性質のある修行者は、とくに気をつけるべきことである。

地獄について述べたい。

地獄には光がない。地獄から這い上がる手段が基本的に存在していない。それで、一度地獄に堕ちると長い間苦しむことになる。

さて、この世に善悪の区別が無いならば、最初から善悪を論じる必要はないであろう。しかし、衆生にとって善悪はまさしく実感されるものである。ところが、善悪は超えることができる。それが智慧の体現であり、真如である。

善悪を認めるが、善悪に左右されない境地が真如である。これは、たとえば病気のキャリアのようなものである。世に善悪があることは知っているが、善悪そのものを超えた境地が覚り（智慧）である。これは、病気の根治（免疫）のようなものである。

また、善悪がそもそも存在しない世界が想定され、間違いなく実在している。それが法界である。ゆえに、法界からこの世へのアクセスは法の句の形を採ることになる。

さらに、善悪が意味を持たない世界も想定され、これも間違いなく実在している。それが地獄である。それで、一度地獄に堕ちると功德を積むことができず、この世に戻ってくるできない。

因果応報と言うのは、善いことをすれば善い世界に生まれ、悪いことすると悪処に堕ちるなどというような単純なものではない。因果応報の真実は、善いことを善いことだと知り、悪いことを悪いことだと知る人は、天界に生まれてついに覚るということである。

また、因果応報の真実は、善いことを悪いことだと言い張り、悪いことを善いことだと言い張るひねくれ者は、善悪が倒錯した地獄に堕ちて長い間苦しむということである。地獄では善いことを為しても善いことだと見てくれず、悪いことを褒める世界である。誰もこんな処に居たくないであろうが、それはまさしくかつての自分が現世においてしたことである。その因縁によって地獄に堕ちるのである。

因果応報についての第一種理解は、真理を真理だと理解する人は天界に赴きついに覚り、真理を真理だと理解することのできない者は地獄に近づくことになるというものである。

因果応報についての第二種理解は、真理ならざるものを真理ならざるものだと理解して離れる人は天界に赴きついに覚り、真理ならざるものを真理だと見なして近づく者は地獄に堕ちてしまうということである。

たとえば、薬を薬だと理解する人の病気は癒えるが、麻薬を（快樂の）妙薬だと見なす者は当初健康であっても末路は悲惨であるようなものである。あるいはまた、麻薬を危険なものだと理解する人は廃人になる怖れが無いが、薬を毒だと見なす者の病はついに癒えないようなものである。

本来、人々に賢愚の区別はないが、それぞれの功德の有無によって賢愚が現れる。そうして、それぞれの人それぞれに相応しい処に行き着くことになる。天界に行って覚るも、地獄に墮ちて苦しむも、各自のことがらである。どちらに行くにせよ、それは自分自身で選んだ道なのである。

私（＝SRKWブツダ）が慧解脱を果たして覚り、仏となってから丁度10年になる。その間、無上の楽しみたるニルヴァーナの境地は、途切れることなく続いている。覚りは、一切の苦悩からの解脱であり憂いなき境地の体得である。その境地が継続しているのである。そして、それは私が生きている間続くことは間違いない。

さて、仏となってからこの10年間にはいろいろなことがあった。覚りと同時に疑惑は去りその真相が明らかになったことがいくつかあるが、それだけでなく覚りが継続する中でこの境地について理解が深まったこともある。本書は、それらについても記した。

また、とくに仏教の世界観について釈尊以来伝えられていることについても一部触れたが、分からないことは分からないと書いた。それでも推定で論じられるものについては論じている。仏がどのように世界を見ているのかを垣間見ることができるであろう。

ところで、何の予備知識もない者がこの本をいきなり読むと理解を超えた奇怪なものに映るかも知れない。覚りの気根のない者が読んでも、混乱して信じることは難しいだろう。そのような場合には、まだ自分には仏縁がないのだと知って考え込まないようにしてほしい。いずれ功德を積むことがあったならば、その時にこそこの本が役に立つであろう。

例によって、この本も必要があれば適宜拡充して行くつもりである。コメントやメールなどで読者の感想や意見があれば歓迎したい。

2011年12月18日 著者記す



『仏道の心髄』

<http://p.booklog.jp/book/40934>

著者：SRKWブツダ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/buddha1219/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/40934>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/40934>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社 paperboy&co.